

# Impact of Response Shift on Time to Deterioration in Quality of Life Scores in Breast Cancer Patients

(乳がん患者における QOL 得点の悪化までの時間に対するレスポンスシフトの影響)

PLoS One, 2014 (2014 Impact factor 3.234)

## レスポンスシフトとは

Sprangers and Schwartz(1999)が、医療評価におけるこの問題を初めて報告。測定と評価；測定する概念と尺度は変化しないことが前提となっているが、現実的には変化する。QOL/PRO指標の評価の際の測定バイアス。レスポンスシフトとは「健康の変化により、PRO尺度に回答する際の個人内の判断基準が変化すること」主観的な指標に回答する際は自分の内部にある何らかの基準を基に判断するが、大きな出来事や変化が起こると、この基準が変化することである。

### レスポンスシフトの3分類

1. 内的基準の変化（今あなたは？振り返ってみると？←‘前’に回答していた得点と振り返ってみた得点は異なる、よく見えるようになってあの時は今思えば随分見えなかったのだなということがわかる）
2. 価値の変化（要素の優先順位の変化、仕事と家族と健康…、重要性が異なってくる。病気をすると仕事を最優先にしていた人が、家族、健康、仕事の順にかわるといったケースがこれにあたる）
3. 意味の変化（概念が再構成される。身体と心ころは異なると考えていたが、切り離せない一体のものであると感じるように変化する状況）

レスポンスシフトは、得点の変化の解釈を混乱させるバイアスになる。

レスポンスシフト自体が治療・ケアの目的になることもある。

### レスポンスシフトの検出方法

個々に尋ねる方法：

1. 振り返り評価 retrospective rating(Then test)
2. 評価表の使用 SEIQOLなど

データに尋ねる方法：

1. 構造方程式モデリング (SEM)
2. 潜在軌道解析
3. 分類回帰木解析
4. 項目反応理論

## Abstract

背景：この前向き多施設共同研究は、乳がん患者における健康関連 QOL 得点の悪化までの時間に対するレスポンスシフトの再校正 dimension(次元)が与える影響と悪化までの時間にベースラインの QOL 期待/見込が与える影響を検討することを目的とした。

方法：QOL の評価には、EORTC-QLQ-C30 と BR-23 が用いられた。診断時 (T0)、退院時 (T1)、退院から 3 か月後 (T2)、6 か月後 (T3) に評価された。再校正は、Then-test 法によって調査された。QOL 予期/見込は、診断時に査定された。悪化は、臨床的に意味のある最小値 (MCID)を考慮して、5 ポイントの減少で定義された。悪化までの時間は、 Kaplan-Meier 法で算出された。Cox 回帰分析が悪化までの時間に影響を与える要因を識別するために用いられた。

結果：2006 年 2 月から 2008 年 2 月までに診断された 381 名の女性が対象。内部基準の変化(再校正)は、悪化までの時間に影響を与えていた。悪化までの時間 (TTD) の平均は、全般的な健康(Global health status)、役割機能(Role functioning)、社会的役割(Social functioning) (←これらは C-30 の dimension)、ボディイメージ(Body image)、副作用 (Systemic therapy side effects) (←これらは BR-23 の dimension) の再校正が考慮に入れられた時よりも入れられなかったときが有意に短かった。Cox 回帰分析では、ボディイメージの再校正が考慮されたとき、放射線療法は悪化までの時間をより短くすることに関連していたが、手術法のタイプは悪化までの時間に有意な関連をしていなかった。全般的な健康、認知的機能 (Cognitive functioning)、社会的機能の次元について、患者のベースラインでの QOL の悪化の予期は、悪化までの時間の短さと有意な関連があった。

結論：レスポンスシフトとベースラインの QOL 予期/見込が乳がん患者の悪化までの時間と関連する結果であった。